

協同学習をとり入れた文学教材を用いた リーディング授業の実践報告

—イギリス文学の散文の場合—

Report on the Effects of Introducing English Literature into EFL Reading Classroom
Activities through Cooperative Learning: On the Prose of British Literature

後 中 陽 子
USHIRONAKA Yoko

The aim of this paper is to report on the effect of introducing literature as a teaching aid into the EFL classroom to educate through cooperative learning.

The use of English literature in EFL classrooms in universities has been decreasing in recent years. It is doubtful whether this tendency meets the needs of students.

As the basis of this study, from July 2009 to February 2010 an English poem was introduced into the classroom as an example of English literature. The results showed that students considered the introduction of a literary text as a teaching material made learning interesting.

With this in mind, from April 2012 to January 2013 some British prose texts were introduced into two EFL reading classrooms through cooperative learning. A total of 90 students at Kansai University were surveyed on their opinions of literary texts as materials for the study of English. The students learned English by reading prose works, and frequently discussed the works in small groups, and then each group recited the prose they chose. This paper, therefore, aims to report on the effects of the introduction of literary texts as a part of teaching materials and of cooperative learning.

キーワード：文学教材、協同学習、イギリス文学の散文と小説

1. はじめに

近年とみに文部科学省が実践的コミュニケーション能力の育成を外国語教育の目標に掲げ、企業がTOEICを重視する風潮にあって、大学の英語教育における文学は縮小される傾向にある。コミュニケーションを重視する日本の英語教育政策のもと、英語教科書の教材としての文学が消えつつあることが指摘されている（江利川，2004，2008）。筆者は、このような大学の文学離れの傾向は、ほんとうに学習者のニーズに合っているのだろうかという疑問を抱く。

教材としての文学の有用性を重要視する意見は根強くみられる。たとえば、斎藤・海木・室

井・中村(2004)は、文学こそ最良の教材であるとして、授業で文学教材をどう扱うか、活用法の工夫の肝要さを説く。江利川(2008)は、教育の目的は人格の完成であるとし、読んで考えさせ、味わい感動させる英語教育が必要であることを主張する。高橋(2009)は、海外では文学教材が1950年代以降に語学教材から外される動向があったものの、1980年代ごろから再評価されてきていること、そして文学教材を用いた英語教育が少数派である現在の日本においても「徐々にではあるが確実に、コミュニケーション能力育成重視に偏った英語教育を見直し、文学教材の価値をとらえ直す試みがはじまっている」(p. 166)と記し、文学教材は多様な教授法で活用できる教材であり、これからの英語教育のあり方として英語教育と国語教育を結びつけていくことの重要性を指摘する。英語教育のなかの文学が縮小した事実を憂い、教材としての文学を重要とみる教育者・研究者たちの意見は、他にも枚挙にいとまがない。

筆者は、これらの主張に賛成であり、文学教材は英語教育から切り捨てられてはならないものと考え、2008年以來、教材としての文学に対する学生の意識調査と文学教材導入の授業実践を行っている。詳細な結果は、後中(2011, 2013)の実践報告に記している。

報告のあらましを簡潔に述べると、2008年の4月から9月、事前調査として私立大学3校232名の学生を対象に、大学の英語教育における教材としての英文学作品(小説、英詩、随筆、寸劇なども含む)に関する意識調査のアンケートを行った。結果、全体の62%(144名)の学生から「文学が好き」という回答があった。そこで筆者は、2009年7月から2010年2月、私立大学2校99名の学生を対象に、一般教養としての英語の授業内で、英文学作品の一例として英詩の導入を実施した。結果、ピアソンの相関係数を用いて統計処理した量的研究に基づくと、英語教育に英詩を導入するきっかけが、教材としての文学に関する学習者の意識に変化をもたらすことが数値の上でも確認された(後中, 2011)。2012年1月には、私立大学1年生28名を対象に、一般教養としての英語の授業内で、協同学習をとりいれて、教材として英詩を導入する授業実践を行った。質的データとして、学習者のコメントを後中(2013)に報告している。

英語授業に教材としての文学作品を導入する一つのきっかけが学生の意識に変化をもたらすという上記の結果をふまえ、筆者は、2012年4月から2013年1月、関西大学において、共通教養科目としての英語の授業内で、教材としてイギリス文学の散文を用い、英語学習の授業を行った。教材としての文学を有用に活用する手段として、授業には協同学習をとりいれた。

協同学習をとりいれたのは、答えが一つと決まっている TOEIC の英語と異なり、さまざまな解釈の自由を許す文学作品の英語を、味わい、吟味するには、小集団で話し合い、コミュニケーションをとりながら、建設的に支え合って学ぶ協同学習が有用であると考えたからである。

Johnson, Johnson, and Holubec (1994) は、協同学習の不可欠な構成要素として、(1)「肯定的な相互依存 (positive interdependence)」、(2)「活発な対話 (promotive interaction)」、(3)「個人の責任 (individual accountability)」、(4)「対人技能および小集団技能 (interpersonal and small-group skills)」、(5)「グループでの振り返り (group processing)」の5つがあることを説

明する。(1)はすなわち、皆が成功しなければ自分も成功ではないという連帯意識、(2)は学ぶために対面して互いに助け合い、支え合い、励まし合う活動、(3)はグループの個々のメンバーをより強い個人にすることが協同学習の目的であるので、ただ乗りはできないと気づき、個人の責任を自覚すること、(4)はグループの一員として役目を果たすために、対人技能および小集団技能（リーダーシップ、信頼の構築、コミュニケーション、対立の処理能力等）を習得すること、(5)はメンバーのどのような行動が助けとなり、あるいは助けとならないか、継続すべき点や改善すべき点をグループで話し合う作業である。海外ではすでに、Natasi and Clements (1991) の研究が、協同学習は小学校から大学にいたるまで認知的・学問的にも社会的・情動的にも利点があり、読解や言語運用科目、数学、社会科、科学を含む幅広い領域に効果的に活用されていることを記している。

日本の大学の英語教育における「協働的」な学習がライティングに活かされた実証研究として、阿部・山西（2013）の研究がある。阿部・山西は、教師の介入が少ない状況で、日本人大学生ペアの主体性に任せた「協働的」なライティング学習の様子を観察し、学習者の対話データをグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析している。その他、大場（2010）による大学生ペアのスピーキング活動に協同学習をとり入れ、スピーキング能力の伸長と協同学習の有効性を調査する報告や、玉井（2010）の文学教材をクラスメイトとの「共同作業」で読み進めていく授業実践報告もある。

Lazar（1993）が、授業のなかで文学教材を使用することは、学生たちが感情や意見の共有を必要とするときに、とりわけ好結果をもたらす方法だと述べるように、筆者はこのたび大学のリーディングの授業内で、文学教材と協同学習を組み合わせ、効果的な英語学習の可能性を探った。

本稿では、2012年度の協同学習をとりいれた文学教材（おもにイギリス文学の散文と小説）を用いた授業実践を報告し、学習者の言語データをKJ法によって分析する。本稿の目的は、大学の英語授業における文学教材の有用性を探るとともに、文学教材を用いて協同学習をとおしたリーディング活動を行うとどのような実態をもたらすかを把握し、効果的な学習指導法の発想を得ようとするものである。

2. 協同学習をとりいれた文学教材（おもにイギリスの散文・小説）導入の授業実践

2.1 対象と授業環境

対象は、関西大学の1年生、文学部44名、法学部46名の2クラス、あわせて90名。授業環境は、英語2a、英語2bの「味わって読むコース」1年生の共通教養科目のリーディング授業内で行った。英語2a、英語2bは、必修のリーディング授業であるが、「味わって読むコース」は文学作品などを教材として、深く読むのを特徴とするコースである。リーディング授業は、4

つのコースのなかから学生自ら選択できる。選択できるのは「味わって読むコース」「うまく読むコース」「楽しく読むコース」「クリックして読むコース」の4つである。

実施時期は、2012年4月から2013年1月まで。前期、後期の2セメスターあわせて30回の授業、全講義をとおして、文学作品（おもにイギリス文学の散文と小説）を教材として用いた。テキストは、清宮倫子・清宮協子編著の *The Poetry and Prose of British Literature* (2011) を使用した。授業の最初に扱った作品は散文ではなく演劇だが、16世紀エリザベス朝の William Shakespeare から読みはじめ、17世紀、18世紀、19世紀、20世紀の代表的な作家の作品から抜粋を読み進めた。30回の講義内で扱ったものは、*The Holy Bible* 他、John Bunyan、Samuel Richardson、Jane Austen、Charlotte Brontë、Emily Brontë、George Eliot、Thomas Hardy、D. H. Lawrence、Virginia Woolf の代表作である。

2.2 授業方法

授業の流れとしては、最初に文学作品を精読し、一作品読むごとに、言葉の意味、作家の特徴、作品の登場人物などについて、協同学習で話し合いを重ねた。協同学習をとおして受講生同士のコミュニケーションをはかりながら、作品を味わって読む能力を養成することが授業の目標である。また、後期第13回の授業では、受講生全員による文学作品の朗読プレゼンテーションを行った。

リーディングに際しては、毎回、分担して訳読の発表者を決めた。発表者は、授業時間外の学習で、担当箇所を周到に調べ、自分なりの訳を工夫し、発表に臨んだ。発表者に求める課題として、発音、訳の工夫、スラッシュ・リーディングによる文法解説、教師の出題に対する応答、以上の点を平常点の内訳の一つとして評価する旨を周知した。

斎藤 (2003) が「言語的な解釈なしに文学の読解はあり得ず、文化を無視した言語理解もあり得ない」(p. 185) と主張するように、本講義では、原文の精読に加えて、音声資料や映像資料を活用し、学生の文化意識を高めることを目指した。各作品のリーディングに入る前に、イギリス文学史を概説し、作品が生まれた背景的知識を学び、作家が生きた時代を身近に感じられるよう、同時代の音楽家のクラシックや、作家自身が当時親しんでいた楽曲など、音声資料を活用した。さらに、リスニング力の向上と作品の内容理解を深めることを目的に、作家に所縁のあるイギリスの土地の写真や映像、文学作品が映画化されたDVDの一場面を、原文のリーディングとあわせて鑑賞した。

協同学習のグループ編成は教師主導で行い、2人ペアで話し合うこともあったが、基本的に4人グループに分けた。グループの組み替えは、一作品話し合うごとに、1セメスターで4回から5回程度行った。特に、朗読プレゼンテーションに際するグループ編成は、ノート・チェックで各学生の平常の予習・復習の努力の度合いや工夫をみながら、グループ内のメンバーで教え合える関係が成り立つように考慮した。

協同学習をとりいれた文学教材を用いたリーディング授業の実践報告（後中）

後期第13回の授業での朗読プレゼンテーションでは、各グループのメンバーで話し合っ、授業内で読んだ作品のなかから好きな一作品を選び、自分たちで読みや配役の工夫をし、読み方がわからない単語は教え合った。教師も随時巡回し、助言と補助に入った。各グループの持ち時間は5分と定めた。授業中は、プロの朗読のCDを学生たちが自由に聴けるように配備し、学生たちは、各々タイマーで計ったり、プロの朗読と重ねてパラレル・リーディングをするなど、発音の練習を繰り返した。

以上のような協同学習をとりいれて文学教材を読む授業の全講義を終えたあと、学生に自由記述形式のレポートを提出させた。紙面の都合上、テキストの具体的読解例を示すのは別の機会に譲るものとし、本稿は、学習者の言語データから考察できる文学教材の可能性と協同学習の効果に焦点を当てる。次節にレポートに基づく言語データの分析を記す。

3. 結果と考察

3.1 分析

本節では、学習者の言語データを川喜田二郎によって考案されたKJ法を用いて分析する。大学の英語授業における文学教材の有用性を探るとともに、協同学習をとりいれた文学教材のリーディング活動がもたらす実態を把握して効果的な学習指導法の発想を得ようとする本研究の目的から、学習者の言語データの分析にはKJ法を用いた。

使用する言語データは、文学部44名、法学部46名の2クラス分のレポートである。文学部は「文」、法学部は「法」として学習者の通し番号をつけたが、両方の学部から類似もしくは共通する概念が抽出された。したがって、このたびの2学部に関して、特記すべき学部別の有意差はみられないと判断し、学部別の表の作成はしていない。収集した言語データは、志が近いもので分類した。次節3.2に結果として表示し、それに基づく考察を記す。

3.2 結果

以下に記す6つの表は、学習者の言語データから、文学教材のメリットとデメリット、協同学習のメリットとデメリット、朗読プレゼンテーション、文学教材と協同学習の組み合わせに関する記述を抜粋し、分類したものである。

表1 文学教材のメリット

<p>新鮮さ、楽しさがある</p>	<p>今までの英語学習と違う</p>	<p>法1 外国文学に触れる機会は少ないので新鮮でした。 法5 今まで学んできた英語は、一つの正解以外は不正解とされてきた。しかし、「味わって読む」の授業では、いろんな訳の可能性を時間をかけて考え、一語一語の意味、文法などまでしっかりと丁寧に考えてとりくむことができ、大切な経験となった。 法13 TOEICでは「速く読む」ことが要求され、じっくり味わって読む暇がない。文学は、実際の会話で使えるわけではないが、楽しく読めて、文法の勉強にもなる。 法20 昔の文学作品を題材とする授業なので、現代の英語表現とは少し違う表現が使われていたことが勉強になった。 法24 受験英語は英語をツールとしてしか捉えていなかったが、登場人物の思いや作者のメッセージを感じ、読みとるのは難解だが、今までとは違う英語で楽しいと思った。 法27 中学・高校の英語の構造を学ぶだけの授業と違った。今までと違う英語が学べた。 法42 中学・高校の英語学習は単語や文法の暗記が中心だった。文学作品を教材として学ぶのは新鮮に感じられた。中・高でできない学習方法を、大学でやるのは重要だ。 法45 中高のように淡々と文法や語句を学ぶのではなく、作品の書かれた時代背景や作者の人物像まで学ぶことで、作品がイメージしやすくなり、自分なりの感想が生まれ、興味をもつようになった。ただ覚えこむという英語とは違った感覚で学ぶことができた。 文15 英語は今まで速読だと言われてきたが、「味わって読む」コースを受講して、英語はもっと自由に、楽しく学んで良いと思った。 文25 物語の背景や、主人公の気持ちを感じる、新しい英語の読み方を体験できた。前より英語が好きになった。 文32 文学作品を使って英語を学習したことが今までなかったので新鮮な経験ができた。 文43 中学・高校の授業では、主に文法中心で、直訳するだけで意味がとれる文章に慣れていた。文学作品で英語を学んだことは、新鮮な経験だった。</p>
<p>物語性 ↓ イメージしやすい 記憶しやすい 世界観が広がる</p>	<p>物語性 ↓ イメージしやすい 記憶しやすい 世界観が広がる</p>	<p>法16 次の展開が気になる。 法19 文学作品はイメージがわかりやすい。 法21 中・高は受験英語でかまわない。そうして出来上がった英語の地盤から、文学作品をとおした英語学習を織り込めば、英語力、文章の読解力、自分のなかの世界観の充実が見込まれる。 法26 作品自体が面白く、自然と英語表現が頭に入ってくる。 文11 作品がもつ世界観が楽しく、やりがいを感じさせてくれた。 文18 文学をとおして英語を学ぶのは、楽しい。物語性がある分、読んでいて面白い。 文19 作品に描かれている人物の動きや感情を考えながら読んでいると、単語の意味も頭に残りやすい。 文39 文学作品の英文は、物語が思い描けると同時に、英語が理解できるようになる。 文40 受験英語と違い、なんといっても魅力があるのがストーリーだと思う。 文41 ストーリー性、文学ならではの表現を通して、英語に対する興味が広がる。</p>
<p>言葉の表現の魅力</p>	<p>言葉の表現の魅力</p>	<p>法1 表現の感性を知ることができ、英語だけでなく日本語の表現力も磨くことができた。 法4 文学作品に用いられる言葉は、丁寧に美しく、表現が豊か。 法14 作品はそれぞれいろんな技法や作風があって面白い。 文21 作者の感性や物語を味わうことが一番。英語を学ぶことは文法を学ぶだけではないと気づかされた。 文26 文学的表現はきれいな言葉で表現されたものが多く、素敵だと感じた。</p>

協同学習をとり入れた文学教材を用いたリーディング授業の実践報告（後中）

<p>達成感が大きい</p> <p>↓</p> <p>学習時間の増加</p> <p>難しさの克服・達成感</p>	<p>難しさゆえの面白さ</p> <p>↓</p> <p>能動的な学習</p>	<p>法2 訳すときは大変だけど、文学特有の訳し方をするのが楽しかった。</p> <p>法14 言葉の省略や、ちゃんと文の形になっていない作品もあったり難しくくて心配したこともあったが、英語の奥深さに気づくことができた。</p> <p>法21 文学作品特有の表現や言葉の表裏を読みとることは非常に難しく驚いたが、徐々に意識が求められている箇所を抜き出せるようになった。</p> <p>法12 難しいから、じっくり読むことができ、辞書を何回も引いた。</p> <p>法18 文学なので、倒置や、一文が長かったりと、難しいなと思った。でも、それこそが「味わって読む」ことではないかと思う。</p> <p>法38 文学は内容が深く難しいが、内容や作者の思いが理解できたとき楽しいなと思う。</p> <p>文30 文学という高度な英語力が要求される教材を用いているため、読解力の向上に最適だと思う。</p> <p>文34 それぞれ作家の癖のようなものがあり、難しいと同時に興味深い点でもあった。</p> <p>文35 言葉のもつ響き、場面に応じた解釈が大切と感じた。言葉の省略や、長い一文など、訳するのに苦戦したが、苦労した分はかえって印象的で味わい深く感じた。</p> <p>文37 文学作品は難しく感じられたが、色々な文法が使われていて、英語学習にもってこいの教材かもしれないと思った。</p> <p>文43 文学は、文章に癖があるように思う。直訳だけでは成り立たないこともしばしば。この難しい訳をするだけでも、読解力も高まると思う。</p> <p>文34 単語もたくさんの意味があり、試行錯誤の末、文脈に即した訳ができた際には、素晴らしい達成感を得た。</p> <p>文40 文学だから作者自身の表現や少し型にはまらないものなどあって当然だと理解するまで、難しいと思っていた。が、それを理解し、たくさんの作者の作品に触れることで、イギリス文学の面白さに気づけた。</p> <p>法6 文学教材を使うことで考える力がついた。</p> <p>法11 文学作品を読んで、作家が読者に何を考えて欲しいのかを考えることができた。</p> <p>法13 作家を身近に感じ、人の考え方や感じ方は今も昔も変わらないとわかる。</p> <p>法17 真意・心情を読みとる作業には積極的な読みが不可欠だが、その意味で、文学作品の読解は大学の英語教育にふさわしい。</p> <p>文13 単に訳すだけでなく、考える力が大切だと思った。</p> <p>文22 現地の写真や映像資料で作品のイメージがつかみやすくなり、自分を主人公に置き換えて読み進めるのが楽しかった。</p> <p>文24 文学のもつ独特な感情表現など、ことばの意味を考えながら、人間的な感情表現を学ぶことが出来た。</p> <p>文27 登場人物の性格を想像しながら、ニュアンスの適した日本語を選び出すことが難しく、考えれば考えるほど楽しくなった。</p>
<p>異文化に興味があく</p> <p>↓</p> <p>作家やイギリスなどへの興味</p>	<p>教養・知識の獲得</p> <p>↓</p> <p>作家やイギリスなどへの興味</p>	<p>法5 時代背景、映画、映像資料等でより作品に入り込めた。</p> <p>法7 作家たちが生きた現地の映像や写真は感性を刺激し、自分もイギリスに足を踏み入れたいと思った。</p> <p>法13 教養は、作家や作品の名前だけ知っていても意味がない。教養を身につける目的で、文学を用いて英語教育をやればいい。</p> <p>法16 英語力だけでなく、文学作品についての知識を得ることができた。</p> <p>法34 文学作品を教材としたことで、英語だけでなく、背景にあるイギリスという国について理解を深められた。</p> <p>法37 文学作品の書かれた時代背景、作者自身の人生など、関連するいろいろなものが学べて、単に英語だけをするより本文に入りやすかった。</p> <p>法38 作者に関する街の風景、映像資料は強く印象に残っている。</p> <p>法46 詰め込み型の学習は、文法・単語・熟語を身につけるのには適しており、語学力上達の観点から見れば評価に値するが、外国の文学を用いた学習を通して、外国そのものの理解を深めていくことは重要である。</p> <p>文9 文学に対する苦手意識が消え、作品や時代背景などに興味をもった。</p>

		<p>文29 イギリス文学は、いかにも固く、難しそうだったが、いざ学んでみると独特の言い回し、当時の政治背景、世界状況がわかり、今まで知ることのなかった知識も学べた。</p> <p>文30 今まで名前を知る程度だったが、作者のことを学んでから読むのは魅力であった。</p> <p>文35 昔の名作をいくつも知ることができたのが嬉しかった。</p> <p>文36 中学・高校で学んだ英語は文法中心、つまり英語を「道具」として使おうとしていた。文化が表現されている英語が英文学だと思った。</p> <p>文44 聖書やキリスト教が、英文学作品に密接につながりを持っていることがわかった。</p>
その他	<p>さまざまな味わい方</p> <p>音のリズム</p> <p>実用的に使える表現</p>	<p>法18 映像を見たり、音楽を聴いたり、時代背景を学んだり、味わう方法の幅が広がり、読むだけでなくいろいろな味わう方法があるのだなと思った。</p> <p>文37 映画などを通して流れをつかみ、作品を楽しむことができた。</p> <p>文38 文学作品はとっつきにくいという印象があった。確かに難しかったが、授業では映像や音楽、実際の現地の写真など、作品と結びつけることができ、いいことだと思った。</p> <p>文42 当時の音楽、作品の映画の一部の鑑賞など、文学を通して英語の苦手克服につながった。</p> <p>文18 文章は難解なところもあったが、生み出されるリズム感とはとてもよかった。</p> <p>文27 プロの朗読を音声で聞いてどのようなリズム、どのような感情をこめて読むのかわかり、家でも練習した。</p> <p>法12 文学のなかには、普段の生活に使える台詞がたくさんあった。</p> <p>法44 文学作品を教材に英語を勉強する場合、実用的な英語は期待できないのではないかと心配したが、現代でも用いる普遍的な表現や文法の解説があったため、実用的な英語も身についたと思う。</p> <p>文30 授業では作品ごとにポイントとなる文法の説明、省略されている語の補完があり、TOEIC対策にも効果があったと私自身は思った。</p> <p>文4 わたしは国文学を学びたいと思っているので、英文学作品について友だちとの意見交換はこれからの大学生活にかならずプラスになるように感じる。</p>

表2 文学教材のデメリット

難易度が高い	<p>法4 『ハリー・ポッター』や『指輪物語』など娯楽要素がある作品のほうが意欲がでる。</p> <p>文24 慣れないので、文学は教材としては難易度が上がり、文法で精一杯な人も出てくると思う。そのため、文法プリントの配布や作品の実写版が見られた配慮はうれしかった。</p> <p>文35 文学に関する考察は、難易度が高く、協同学習で意見を求められても述べることができなかつたときも、じつはあった。</p>
--------	---

表3 協同学習のメリット

コミュニケーション能力の向上	<p>法2 クラスメイトと気軽に話せるきっかけ作りになる。</p> <p>法19 知り合いができ、話しやすい環境になることも魅力。</p> <p>法26 いろんな人の考え方を知り、友だちもでき、コミュニケーション力が上がるので将来に役立つ力になる。</p> <p>法39 入学したては知り合いもおらず不安な時期。協同学習で人との接点が増えてやっていけそうな気がした。</p>
友だちができる	<p>文3 会話する機会があるので、内気な人でも喋りやすい環境が作られる。</p>

協同学習をとりいれた文学教材を用いたリーディング授業の実践報告（後中）

	<p>文4 協同学習を義務教育からとりいれるべきだと思う。協同学習で、友だちが増えた。</p> <p>文12 グループワーク中、若干の対立。全員納得する答えを必死に出そうとし、仲良くなって、授業外でも話すようになった。</p> <p>文19 コミュニケーションができ、友だちになれたりする。協同学習という目的があるから、話しかけるきっかけもできやすい。</p> <p>文29 話すことでコミュニケーションがとれ、仲良くなることもある。</p> <p>文30 入学したてのときは友だちもいなくて、協同学習に不安があった。しかし実際してみると、他の人の意見を聞くのは面白いと感じた。協同学習の魅力は新しく友だちができること。</p>
協力・助け合いの関係	<p>法9 ふだんの授業では、私語はしない。授業内容で疑問に思ったことを友人に聞ける時間はほぼない。授業時間内に協同学習を設けることで、クラスの人と話す機会が生まれ、親しくなると、協同学習の時間外でも気軽に尋ねることができるようになる。疑問の早期解消により、授業から遅れる学生を減らす効果が期待できる。</p> <p>法15 協同学習で知り合った友だちがいる。足りないところを皆に助けてもらった。皆が優しく接してくれたときはとても助かった。</p> <p>文2 一人でできなかったことを友だちや先生に協力してもらってできたこともあった。</p> <p>文5 理解できている者が理解に乏しい者に教えることで、理解ができている者も相互に理解を深められる。</p> <p>文14 授業でたくさん話してできた友だちもいて、授業外でも話したりする。困ったときは助けてもらい、相手が困ったら助けようと頑張る。協同学習があったからこそそのつながりだ。</p> <p>文29 同じグループの人が優しく教えてくれて、逆に自分が教えることもした。互いに補い合うことができた。</p>
参加型の授業	<p>文9 人にわかりやすい話し方が出来ることで、話し合いの質が上がる。積極性を身につけることができる。</p> <p>文14 授業に“参加している”という実感をもって受講できた。</p> <p>文17 自分の意見を持ち、主張できる人材の育成に協同学習は有効だ。</p> <p>文19 リーダーシップをとって議論をまとめたり、参加できない人を入れてあげたり、人としての力を向上させる良い機会になる。</p> <p>文43 相手の意見を聞き、自ら意見を発信することで、コミュニケーション能力が身につく。</p>
刺激 ↓ 新たな発見「気づき」がある	<p>法2 友だちをみていると一人一人工夫しているところがあって刺激ももらった。</p> <p>法7 他人の意見を聞くことができ、自分の考えが180度変わったり、共感を得ることは喜びを感じる。グループのメンバーが借りてきた本を持っていて、話題が広がったりもした。</p> <p>法8 他の人がどんな解答を作り、どんな思考回路で答えに辿りついたかを知る良い機会だった。</p> <p>法19 まわりの人の学習法を知ることができ参考になった。</p> <p>法20 まわりとの意見交換で、楽しく理解することができた。</p> <p>法43 最初は話しづらかったが、慣れると大丈夫。他人の意見をきくことで刺激を受けた。</p> <p>文12 各自の個性が出て楽しく考えを共有できたり、関係ない話で盛り上がり、主人公の心情を深く話しあったり、ノートを見せあって、きれいなノートの子ばかりだったので、ノート・チェックの際の参考になった。</p> <p>文35 他の学生の考えを知ることが出来る。</p> <p>法45 人に意見を話すことで自分のなかで整理ができ、一人では発見しえなかったことに気づけた。</p> <p>法46 複数人で、互いに助力しながら学習を進めることは、一個人での学習における一方からの理解ではなしえない、より深い理解を得ることが可能である。</p>

	<p>法29 協同学習の過程で、「気づく」ことがたくさんある活動だと感じた。</p> <p>文9 他の人との意見交換によって、新たな発見ができた。</p> <p>文16 意見交換を通して、自分の間違いが見えた。自分と異なる見解の人がいることは当然だと、改めて気づく。</p> <p>文27 一人の力では見えなかったことが、ほかの意見を知ることで新しい発見が生まれる。自分のものと他人のものとを組み合わせると、より良い意見が出てくる。</p> <p>文36 協同学習を通して、出来る人は努力をしていること、わからないなりに調べ、工夫して、苦手でもとりくむ人がいること、なかなか気づけなかったことに気づけた。</p>
視野が広がる	<p>法25 意見交換できたときは視野が広がる。</p> <p>法40 僕は協同学習が嬉しかった。一人で学習するより何倍も知識を吸収できる。</p> <p>法42 人見知りなので、協同学習できるか心配だったが、話し合うテーマが決まられているので、初対面の人と話すのも苦にならなかった。人と意見を交わすことの重要性を知り、その前提として自分の考えをもつことの大切さ、それを相手に伝える技術を学び、視野が広がったと思う。</p> <p>文7 単独学習より、さらに理解を深めることができた。考えを述べあうことで、刺激があつて、作品に対するイメージが変化したり、視野が広がる。</p> <p>文13 自分とは異なる観点を得ることができる。</p> <p>文18 性別の違う相手、自分では考えられなかったような意見が聞けて興味深かった。</p> <p>文20 視野が広がる。</p> <p>文33 たくさんの人の勉強方法を参考にできるのが助けになった。他の人の考え方、訳の仕方に触れることで自分のレパートリーが増える。</p>
柔軟な考え方 ↓ 協調性	<p>法19 柔軟な考えをもつことができる。</p> <p>法28 人との交流の楽しさ、自分の価値観や意見を主張する気持ちの強さ、他人の意見を否定せず一緒に考えていく柔軟な対応の大切さを学んだ。</p> <p>法30 他人の意見を理解しようとするようになった。人見知りな性格がましになった。</p> <p>法31 英語能力だけでなく、コミュニケーション能力や協調性という部分も身につく。</p> <p>法32 自分の答えも間違っていないし、相手の答えも間違っていない。考えが広がった。</p> <p>法33 コミュニケーション力の向上はもちろん、相手の意見に全面的に反論するのではなく、「そのような考え方もあるのか」と考えをさらに深める機会となる。これが外国の人とできるようになれば、より高い議論ができるだろう。</p> <p>法41 はじめ、話しづらい、気まずいときもあったが、慣れてくると、人に自分の意見が認められると嬉しいし、人の意見をとり入れることも大切だと実感した。</p> <p>文34 自分の意見ばかり尊重していると相手に不快な思いをさせたり、結論が出せないこともある。わたしたちの班は、皆が譲りあい、冷静に話しあうことができた。授業を通して、英語の知識だけでなく、協調性を学んだ。</p>
責任感	<p>法24 個人の責任の明確化という点で、毎回クラスの中で訳を一人一人が分担して訳すようになっていたので、クラス全体として協同学習になっていた。</p> <p>法29 メンバーに迷惑をかけられないという責任感も生まれ学習がはかどる。</p> <p>文16 協同学習であれば、相手の人に迷惑をかけないようにと、学習意欲が増す。</p> <p>文18 相互に協力関係があり、個人の責任があるということで、自分の責任をまっとうするため真面目に予習にとりくめた。</p>
連帯感	<p>法29 連携がうまくいけばすごい力を発揮し、逆にうまくいかないと、台無しになる。</p> <p>法40 英語だけでなく、協同の大切さを学んだ。</p>

協同学習をとり入れた文学教材を用いたリーディング授業の実践報告（後中）

	<p>文3 仲間意識ができた。道徳面を学ぶことができた。小学生の授業から導入すべきだと思う。</p> <p>文4 人間関係も育まれ、コミュニケーション力にもつながる。</p> <p>文20 数人で一つのことに向きあうことで、自分の役割をしっかりと果たさなければという連帯感も生まれる。</p>
学習意欲の向上	<p>法5 友だちとの交流をとおして、もっと英語を出来るようになりたいと思うようになった。</p> <p>法12 みんなが仲良かったので、自然と意欲が出た。</p> <p>法40 友人は仲間であり、ときにライバル、少しでも多くのことを学びとろうと思ひ、勉強が苦にならなかった。</p> <p>文7 一人でしておくべき学習への責任感も生まれるし、意欲向上につながる。</p> <p>文30 意見交換で自分より上手な訳をしている人がいて、自分ももっと勉強したいと意欲が湧いた。良い刺激になった。</p>
集中力など	<p>法29 一人で勉強すると眠ってしまったり意欲になりがちだが、互いの顔をみながら話し合う行為が学習意欲を高めてくれる。</p> <p>文8 一人で黙って受講していると集中力がもたない。しかし、協同学習で話しあうのが息抜きにもなった。</p> <p>文17 協同学習は、気分転換のような役割も果たしたように思う。</p> <p>文20 眠くなる。</p> <p>文31 いろんな人と話しあうことで、英語学習の堅いイメージを崩すことができ、英語＝外国語だから難しいという抵抗感を少なくすることもできた。</p>

表4 協同学習の問題点

個人レベル	人見知り・恥ずかしさ	<p>法23 わたしの場合、沈黙を破ること、男性に話しかけることを難しく思った。</p> <p>法24 短時間では、円滑な人間関係を生むことができず、ごちない思いもした。しかしコミュニケーション力は、それなりにつけられるようになっていったと思う。</p> <p>文1 雑談になったり、人見知りで会話に入れないということもある。そこを少し頑張ったらコミュニケーション力の向上につながる。</p> <p>文31 人見知りや人付き合いが苦手な人は少し大変かもしれないが、話し合っ理解を深めることは重要だ。</p>
集団レベル	グループ内の壁	<p>文17 グループ内にすでに仲良しの人たちが多数いたために、壁を感じるということがあった。</p> <p>文26 私は人付き合いがうまくない。すでに仲良しの友だちグループができてしまっている人とは、なおさら会話が難しく感じられてしまう。しかし、協同学習の意義は理解できる。苦手だからやらない…というままでは駄目で、成長したいと思った。</p>
	無関係な話になる	<p>法24 親しい人同士がグループ内にいすぎると関係ない会話になってしまうこともある。</p> <p>法44 学力の高い学生が、学力の低い学生と同じグループになると、関係ない話題に巻き込まれたり、話し合いができない場合がある。</p>
	面倒がる人、やる気のない人がいる	<p>法3 面倒くさいと思って他のことをする人がいると、グループの雰囲気が悪くなり、みんなのやる気もなくなってしまうことがある。一人一人が積極的に話し合おうという態度が大切だ。グループ内にリーダーを決めるといいのではないか。</p> <p>法23 最初のころ、一人だけやる気があっても、他の人たちがやる気がない限り、協同学習は成立しないと思うと不安になった。だが実際は、話したことがない人も積極的に話してくれた。ただし、すべてが成功したわけではなく、話はずまず終わったこともある。</p> <p>法29 意欲がない人ばかりが集まると、ただ乗りを期待して誰も発言せず、協同学習にならなくなることもある。</p>

	<p>文1 メンバー全員がきちんととりくもうという意識がないと成り立たないなと感じた。</p> <p>文20 他人任せの人や、積極的に発言していくことが不得手な人も少なくない。誰か一人話し合いを仕切り、全員の発言を促せる人を作ることで、これらの問題を解決できるのではないか。</p>
理解度の問題	<p>法22 グループの皆の意見が一致していた場合、あるいは皆が理解に苦しんでいた場合、話し合うことができない状態になる。</p> <p>文5 メンバー全員が理解に乏しいとき、単なるおしゃべりになってしまう。</p>

表5 朗読プレゼンテーション

朗読発表	<p>作品理解の深化</p> <p>↓</p> <p>発音・読み方への注意喚起・感情移入</p>	<p>法7 朗読発表は、台詞を分担するなど工夫して、より深く内容を考え、感じることができた。</p> <p>法8 英語独特のリズムを体感できた。</p> <p>法10 発音、語調にも気を配り、心を込めて読むには、しっかりとした作品解釈が求められた。</p> <p>法12 朗読は、作品のなかに入り込むのに一番よい方法なんだとわかった。声の調子で登場人物の感情を表現するのは難しかったが、イメージを意識して読むことは意味がある。</p> <p>法15 朗読発表は責任も感じられ、音の強弱、感情移入もできた。</p> <p>法18 朗読練習は、間をあげたり、読むスピードを早くしたり遅くしたり、簡単なことではなかった。</p> <p>法33 文学特有の文章の朗読の仕方が印象的だった。スピード、抑揚、息遣いなど読み方を変えることで、一般的なリスニング教材と違い、同じ英語でもこれほど違ったものになるのかと新鮮さを感じられた。</p> <p>法35 意味のまとまりごとに区切るよう心がけた。</p> <p>文21 朗読発表も、発音の相談もしたし、登場人物はどんな気持ちかをグループの人たちと話し合ったことで、物語に入り込めた。こんなグループ学習は新鮮だった。</p> <p>文29 人前でイギリス文学を朗読することは貴重な経験になった。グループのメンバーと、どう読めばより伝わるか、速さ、区切り、間のとり方を試した。それによって良い朗読ができたと思う。苦手意識が薄れた。</p> <p>文39 声に出して朗読すると、一つ一つの単語の発音を調べ、意識しながら読み進めることができた。</p>
	協 力	<p>法10 グループ内で最も良い形で発表する方法を模索する経験は貴重なものだった。</p> <p>文28 朗読発表では、作品の選定から、練習・発表に至るまで、他の人と協力し、自分の考えを表現し合うことができた。チームの一員として、何ができるか考え、また他の人に助けられた。</p>
	聞き手を意識	<p>法18 責任感も感じられる。朗読することをとおして、他の人に味わってもらおうということを考えた。</p> <p>法35 朗読は、内容をわかりやすく、聞きとりやすくするための工夫をグループ内で話し合った。</p>
	刺 激	<p>法10 他のグループの朗読発表を聴くことで、感心するような役の配分があったり、参考になる演出があった。</p> <p>文28 他のチームの朗読を聴いて、自分の発音の間違いに気づいた。</p> <p>文37 朗読発表で話し合っていたとき、グループの人たちの真剣さに触れて、刺激ももらった。</p> <p>文38 協同学習は、朗読発表が一番記憶に残った。他のグループの工夫がいいなと思った。</p>
	認め合う気持ち	

協同学習をとり入れた文学教材を用いたリーディング授業の実践報告（後中）

表6 文学教材と協同学習の組み合わせ

<p>文学教材 × 協同学習</p>	<p>話し合いで味わいが増す ↓ 解釈・視野が広がる</p>	<p>法3 文学のテーマをグループで話し合うことで作品の世界観をいっそう味わえた。 法6 文学には解釈がたくさんある。協同学習はさまざまな解釈に気づかせてくれる。 法9 比喩や含みをもたせる文学作品では、解釈が人により異なる。協同学習は、意見交換が可能であり、気づかなかった部分に気づいたり、別の視点で作品をみることができる。 法10 作者の真意を発見するのに、協同学習は助けとなる。一人では見えないものが見えたり、新しい角度から作品が見られる。 法12 文学は人によって感想が違うので、たくさんの人の意見を聞けるのは楽しかった。何回も読むうちに、協同学習の内容も濃くなった。 法19 文学ならではの難しさも、協力して考えたり、意見を出し合うことで、作品の深いところまで読みとろうとするようになる。 法22 協同学習を重ねるにつれ、文学作品の理解度が深まると実感した。 法28 文学は作品を読んだ人の数だけ解釈があり、違った解釈をした人たちが話をする過程で視野が広がった。 文6 グループで教えあうことで、異なった考えを知ることになり、作品を違う方向から見ることができる。作品に入りやすくなった。 文15 文学作品の一つの単語のニュアンスの受け止め方は個人によってばらつきがある。そこで協同学習が意味をもつ。正解は個人の心のなかにいくつも存在する。 文19 協同学習を通して、文学を教材として学ぶことは、楽しい。勉強に対する苦痛を感じなかった。 文21 他人と意見を共有することで、物語の理解をいっそう深められ、文学をより味わって楽しめた。 文23 自分では完璧だと思った訳も、協同学習した友だちがさらにびびったりの意識をしていたとき、人によって文章の感じ方がさまざま、単に文法や単語の知識だけではないのだなと思った。物語の流れ、登場人物の性格、作者の考えを見抜くセンスも必要と思った。 文25 他の人と物語について話すことで、共感したり、人それぞれの感じ方を発見した。感じ方をさらに広げるのが協同学習だった。 文31 文学作品を題材にしたことで、多くの人が自由に想像し、自由に意見交換し、雑談にならなかったのだとわたしは思った。</p>
	<p>相性がよい</p>	<p>法10 文学作品という教材は、協同学習と相性がいい。 法36 協同学習は、最初はすごく不安だった。何度かやるうち楽しめるようになった。楽しいと感じることができたのは、話す題材が文学だったことが一番だと思う。すごく難しい部分もあったが、だからこそ人によって訳が少しずつ違ったりして、協同学習のやりがいがあった。話したことがない人であっても、英語の文学教材を通して話せたのでクラス全体の雰囲気がすごくよかったと思う。 文1 協同学習は、論理的な文章よりも感覚的文章の場合が有効だと思う。文学作品には感覚的な表現が多いので、この授業で協同学習はとてもよい。 文3 文学作品はただ読むだけでなく、そこからどう感じるかが大事だ。一人で感じるだけでなく、他者と共に感じることで本当の文学の良さを味わうことができる。 文14 文学教材を用いたからこそ、多くの協同学習にとりくめた。 文28 文学作品は協同学習に有効的である。</p>

3.3 考察

上記6つの表に基づく考察を以下に記す。

[1] 文学教材のメリットとデメリットに関する考察 (表1、表2参照)

教材として文学作品を用いて英語学習することのメリットは、大きく分けて①「新鮮さ、楽しさがある」②「達成感が大きい」③「異文化に興味がわく」の3つがある。

①「新鮮さ、楽しさがある」ことについて考察する。学習者は文学教材に新鮮さを感じている意見(法1、文32、文43参照)が複数みられた。新鮮さを感じる要因には、おもに次の3つが考えられる。第一に、「今までと違う英語」(法24、法27)という記述にみられるように、中学・高校までの受験英語とは異なる英語学習であったこと、TOEICの速読重視の英語とは違い、「じっくり味わって読む」(法13)、「ただ覚えこむという英語とは違った感覚」(法45)で英語を学習したこと。第二に、「作品自体が面白く、自然と英語表現が頭に入ってくる」(法26)、「作品がもつ世界観が楽しく、やりがいを感じさせてくれた」(文11)、「物語が思い描けると同時に、英語が理解できる」(文39)との記述にみられるように、ストーリーがあるために、イメージしやすく、記憶しやすく、世界観が広がるという楽しみ方があること(「物語性」参照)。第三に、「文学作品に用いられる言葉は、丁寧で美しく、表現が豊か」(法4)という記述が端的に指摘しているように、原文の英語においても、訳した日本語においても、文学作品にみる言葉の表現の豊かさ、美しさが、学習者にとって新鮮であったことがうかがえる(「言葉の表現の魅力」参照)。

②「達成感が大きい」ことについては、「作家の癖のようなもの」(文34)、「文章に癖があるように思う。直訳だけでは成り立たない」(文43)、「倒置や、一文が長かったりと、難しいなと思った」(法18)という記述にみられるように、文学特有の表現の妙に気づき、難しいからこそ「辞書を何回も引いた」(法12)という学習時間の増加、「試行錯誤の末、文脈に即した訳ができた際には素晴らしい達成感を得た」(文34)という、努力、難しさの克服を経たあとの、達成感の大きさが学習意欲の向上に効果を生んでいることがわかる。

また、「考える力が大切だ」(文13)、「読みとる作業には積極的な読みが不可欠だ」(法17)、「自分を主人公に置き換えて読み進めるのが楽しかった」(文22)などの記述から、考える力、読みとる力、共感する力、想像する力が、文学作品の英語に向き合うなかで培われていく実態がうかがえる。文学教材がもつ難しさと面白さが、学習者を能動的な学習、自律学習へと導いているといえる(「考える力—能動的な学習」参照)。

③「異文化に興味がわく」ことについては、文学をとおして英語を学ぶことで、作家や作品に関する教養としての知識が得られるという意見(法13、法16、文29、文30、文35参照)がみられる(「教養・知識の獲得」参照)。また、今回はイギリス文学の作品を扱ったことで、「イギリスに足を踏み入れたい」(法7)という記述にみられるように、イギリスへの興味喚起され、「外国そのものの理解を深めていくことは重要」(法46)、「文化が表現されている英語が英

文学だ」（文36）という記述にみられるように、作品が生まれた時代背景、歴史、そして文学と密接に関する聖書・キリスト教など、異文化の理解の重要性に目が向けられた学習者の実態がうかがえる（「作家やイギリスなどへの興味」参照）。

その他のメリットとしては、「時代背景を学んだり、味わう方法の幅が広がり、読むだけでなくいろいろな味わう方法があるのだなと思った」（法18）という記述にみられるように、文学作品ならではの、多様な味わい方があること、とりわけ、文学作品がもつ「リズム感」（文18、文27）に目を向けているコメントがみられた（「さまざまな味わい方」参照）。さらに、「文学のなかには、普段の生活に使える台詞がたくさんあった」（法12）、「実用的な英語も身についた」（法44）、「TOEIC対策にも効果があったと私自身は思った」（文30）という記述がみられるように、文学教材は、決して実用性とかけ離れたものではない（「実用的に使える表現」参照）。

他方、文学教材のデメリットは、文学は難しいという印象を学習者に与えることだといえる（「難易度が高い」参照）。「慣れないので、文学は教材としては難易度が上がり、文法で精一杯な人も出てくる」（文24）という記述にみられるように、慣れていないことが難しさの一因であるならば、慣れていないがゆえに「新鮮さ、楽しさがある」というメリットが感じられるよう導く工夫によって、解決策が見出せる。難しさを、難しさの克服、理解できたという達成感へと導くことが肝要と考えられる。

〔2〕協同学習のメリットとデメリットに関する考察（表3、表4参照）

協同学習をととした学習のメリットは、総括すると、コミュニケーション能力の向上にあるといえる。

協同学習という目的が、クラスメイトとの話しやすい環境をつくり（「話せるきっかけ」参照）、話すことをとおして、友だちができていく。友だちができれば、話し合う機会が増え、コミュニケーションの練習になる（「コミュニケーション能力の向上」参照）。コミュニケーションをとおして、友だちとの人間関係が築かれていき、「皆に助けてもらえた」（法15）、「協力してもらってできた」（文2）、「相手が困ったら助けようと頑張る」（文14）という仲間意識、相互に補い合い助けようとする精神が培われていく（「協力・助け合いの関係」参照）。これはすなわち、「人としての力を向上させる」（文19）という記述にみられるように、道徳面での成長が、協同学習には期待できるという実態がうかがえる。

また、協同的に学ぶという行為には、さまざまな刺激がある。意見交換や、学習法の情報交換、調べた話題の共有などが良い刺激となり、一人では気づかなかったことに気づくようになる（「新たな発見「気づき」がある」参照）。

「気づき」があって、視野が広がると、「人に自分の意見が認められると嬉しいし、人の意見を取り入れることも大切だと実感した」（法41）という記述にみられるように、相手を否定するのではなく、互いに考えを深め、話し合うことの大事さを知るようになる。相手の意見を聞くことで、「そのような考え方もあるのか」（法33）と他者を認め、柔軟な思考ができるようになり、

協調性が身につく（「柔軟な考え方—協調性」参照）。相手を尊重する精神は、さらなる人の輪を生み、コミュニケーション能力の向上へとつながっていく。

協調性とはすなわち、協同調和の精神である。互いに他者への配慮を知れば、「協同の大切さを学んだ」（法40）、「仲間意識ができた」（文3）、「相手の人に迷惑をかけないように」（文16）、「自分の役割をしっかりと果たさなければ」（文20）という責任感が生まれ、それが学習への真摯なとりくみのモチベーションとなっている（「責任感」、「連帯感」、「学習意欲の向上」参照）。こうして培われた連帯感、仲間とのコミュニケーションの楽しさへとつながっていく（「人間関係も育まれ、コミュニケーション力にもつながる」文4参照）。

以上みてきたとおり、協同学習のメリットは、すべての要素が有機的につながり、相互補完の関係にあるといえる。

このようにメリットの多い協同学習であるが、学習者のコメントから次のような問題点が浮かび上がった。以下、協同学習の問題点とその解決策を考える。まず、協同学習が成り立たないのは、どのような場合かを考えよう。

個人の段階では、「人見知りや人付き合いが苦手な人は少し大変かもしれない」（文31）という意見にみられるように、性格的に、話しかけたり、コミュニケーションをとるのが苦手だという場合がある（「人見知り・恥ずかしさ」参照）。解決への案としては、活発な人は他者への配慮を忘れず、内気な人は勇気をもって「ごちない思ひ」（法24）や「人見知りで会話に入れない」（文1）という気持ちを克服できれば、コミュニケーション能力の向上につながるだろう。教師側も話しやすい環境づくりへのいっそうの配慮が必要と思われる。なお、筆者は2012年度の1年間受講生をみてきて、前期はとまどう学生があったものの、しだいに学生たち自身が慣れてきている様子がかがえた。協同学習を繰り返すこと、慣れも肝要である。

次に、集団の段階では、以下に挙げる4つの問題点がみえてきた。①「グループ内の壁」②「無関係な話になる」③「面倒がる人、やる気のない人がいる」④「理解度の問題」の4つである。

①グループの組み替えは、比較的頻繁に行ったが、「グループ内にすでに仲良しの人たちが多数いたために、壁を感じる」（文17）場合や、「すでに仲良しの友だちグループができてしまっている人とは、なおさら会話が難しく感じられてしまう」（文26）場合など、人見知りする性格の人にとっては、いっそう話すのに勇気を要する場面があることがみうけられた（「グループ内の壁」参照）。特にこの問題は、協同学習の導入初期の段階に起こりがちな状況と考えられる。仲良くなることは素晴らしいが、仲が良い相手とだけ話すのではなく、まわりへの気遣い、協調性を各自がもてるよう、教師の巡回の頻度を増やすなど、グループ全体としての協力を促していきたい。

②グループでとりくむべき課題と「関係ない会話」（法24）になることを問題視する意見がみられた（「無関係な話になる」参照）。Jacobs, Power, and Inn（2002）が、ちょっとした間のおしゃべりはグループ内にリラックスした信頼の雰囲気をもたらすので、反対するべきではない

とみなしているように、筆者もコミュニケーションを円滑に行うための会話ならば、「関係ない会話」もある程度必要だと考えている。しかし、それがグループの協調を妨げるほどであってはならない。Barkley, Cross, and Major (2005) は、おしゃべりや口論など課題と逸れた行動になるのを最小限にするために、グループの組み替えや活動の時間制限、教師が物理的に学生たちに接近すること、課題と無関係なふるまいが学習環境のなかでどのようにみなされるか学生自身に思い出させることを勧めている。早めに課題が終わっているグループには新たに話し合う課題を提供できるよう、教師の細かな観察が必要と思われる。

③「面倒くさいと思って他のことをする人がいると、グループの雰囲気が悪くなり、みんなのやる気もなくなってしまう」（法3）という記述にみられるように、グループのなかで、協同の姿勢を示さないメンバーがあった場合、グループ全体のモチベーションが下がる可能性がある（「面倒がる人、やる気のない人がいる」参照）。「一人一人が積極的に話し合おうという態度が大切だ」（法3）という意見にみるとおり、協同学習のメリットとして挙げた「協調性」「責任感」「連帯感」の意識を各個人がもてるよう促し、協同学習の不可欠な構成要素の一つである「個人の責任（individual accountability）」(Johnson et al., p. 6) の明確化を徹底させていきたい。

④「皆が理解に苦しんでいた場合、話し合うことができない」（法22）という記述にみられるように、グループのメンバー各自の理解度が低いとき、協同学習できない場合がある（「理解度の問題」参照）。グループ内の理解度については、授業中の教師のサポートとグループ編成の工夫でカバーできる場合がある。しかし、そもそも協同学習は、異なる学力をもつ学生が集まり、教え合い、助け合うことで本領を発揮する。したがって、習熟度別のクラス編成の場合、学力が低いクラスでは協同学習の導入が難しくなる。これは、学校教育全体の大きな課題として考えていくべき問題であろう。

〔3〕朗読プレゼンテーションに関する考察（表5参照）

協同学習をとおしての文学作品の朗読プレゼンテーションに関しては、メリットについての意見のみだった。

とりわけ、多く出た意見として、発音・読み方への注意の喚起がある。「リズム」「発音」「語調」「登場人物への感情移入」「イメージ」「音の強弱」「間のとり方」「スピード」「抑揚」「息遣い」「意味のまとまり」「区切り」、以上が学習者のコメントにみられる彼らが得た朗読上の「気づき」である。朗読をとおして、これらの点への注意が喚起された実態がうかがえる。また、「台詞を分担するなど工夫して、より深く内容を考え、感じることができた」（法7）や「グループの人たちと話し合ったことで、物語に入り込めた」（文21）という記述にみられるように、朗読の工夫の話し合いはいつもの作品理解へとつながったと考えられる（「作品理解の深化」参照）。

さらに、グループ内での協力はもちろんのこと、他のグループへ向けられた関心を示す見解があったことも興味深い。「他の人に味わってもらおう」（法18）、「聞きとりやすくする」（法35）

ということをおき、発表する側として聞き手を意識している様子がうかがえる（「聞き手を意識」参照）。逆に、聞き手側として、他のグループの朗読を聞き、相手の工夫・努力を認め（「感心するような役の配分があった」法10、「他のグループの工夫がいいな」文38参照）、「自分の発音の間違いに気づいた」（文28）などの刺激を得て、認め合う意識が培われている（「刺激—認め合う気持ち」参照）。このような学習を「新鮮」（文21）、「苦手意識が薄れた」（文29）ととらえる意見がみられることから、学習者のモチベーションを高めるのに、文学教材の朗読は効果的だと考えられる。

〔4〕文学教材と協同学習の組み合わせに関する考察（表6参照）

「グループで話し合うことで作品の世界観をいっそう味わえた」（法3）、「物語について話すことで、共感したり、人それぞれの感じ方を発見した」（文25）、「人によって文章の感じ方がさまざま、単に文法や単語の知識だけではないのだなと思った。…（略）…作者の考えを見抜くセンスも必要と思った」（文23）という記述がみられるように、協同学習による話し合いが、作品についての新たな発見を学習者に与えている。多様な視点、解釈を知ることで、文学作品の味わいが深まるのである（「話し合いで味わいが増す」参照）。

また、「文学作品という教材は、協同学習と相性がいい」（法10）、「文学作品は協同学習に有効的である」（文28）という記述があるように、文学教材と協同学習の相乗効果を端的に指摘する意見がみられた。文学教材と協同学習がなぜ、相互補強関係にあるのか、それは答えが一つと決まっている TOEIC 等の英語学習と異なり、文学作品のもつ解釈の自由さ、可能性の広さ、感性に訴える内容が、協同学習の話し合うという学習スタイルに適合しており、幅広い話題を提供し、多くの意見を出し合うことが刺激となって、「楽しい」という実感を学習者に与えることが可能となるからだと考えられる。したがって「文学教材を用いたからこそ、多くの協同学習にとりくめた」（文14）という意見が出てくる（「相性がよい」参照）。

想像力豊かに意見交換することで、文学の味わいが増し、学習者は解釈の可能性の広さに気づく。視野が広がり、「楽しい」と感じられるようになるのである。学習者の意欲を高め、自律した学習者を育てるのに、学習を「楽しい」と感じることは、最良のモチベーションとなるだろう。このように、文学を教材とする協同的な学習は、英語学習に非常に有用であるといえる。

4. おわりに

本稿では、協同学習をとり入れた文学教材（おもにイギリス文学の散文と小説）を用いたりーディング授業の実践と、学習者の自由記述による言語データの KJ 法に基づく分析を報告した。

文学を教材として英語学習することについて、文学は「難易度が高い」ことがデメリットとして挙げたが、一方で、難しいからこそわかったときの達成感が大きい、学習時間が増えるというメリットが挙げた。文学教材のメリットとデメリットは紙一重であり、教師側の工夫

をとおして、「難しい」という苦手意識が「わかった」という喜びに変わる授業を目指したい。

その工夫の一つが、このたびの協同学習を授業にとり入れる試みであった。通年30回の授業に協同学習をとりいれたことについては、「友だちができる」「視野が広がる」他、多くのメリットが学生の声からうかがえたが、同時に、デメリットも浮かび上がった。学習者の視点からみて、協同の大切さは理解できても難しさを感じている場合がある（「協同学習の意義は理解できる。苦手だからやらない…というままでは駄目で、成長したいと思った」文26参照）。学習者が協同学習の難しさを感じる要因となるのは、個人の段階では「人見知り・恥ずかしさ」、集団の段階では、「グループ内の壁」、「無関係な話になる」、「面倒がる人、やる気のない人がいる」場合にはグループのモチベーションが下がること、グループ内の「理解度の問題」という、あわせて5つの事項である。筆者は、2011年度以前は、協同学習を半期15回の授業のなかで1回程度とりいれたが、その際には、協同学習に関する否定的な意見は出なかった（後中、2013）。協同学習を頻繁にとり入れるにともない生じる問題点にも注視し、その解決策を考えていくことを今後の課題としたい。

協同学習をとおしてさまざまな視点、解釈を知ることが、文学作品の味わいをいっそう深くする。文学教材を用いた効果的な英語授業を、これからも模索していく予定である。このたびの授業実践では、文学作品がもつリズム、言葉の表現の美しさに学習者が敏感に気づき、朗読プレゼンテーションでは、とりわけ音に関する細部への注目が顕著であった。具体的には、「リズム」「語調」「音の強弱」「間のとり方」「スピード」「抑揚」「意味のまとまり」「区切り」といった語句が学習者のレポートにみられた。このことから、文学教材の可能性としては、文学作品は音読練習にも適した教材であり、音声面や発音指導にも有用性を発揮するのではないかと考えられる。

本稿では、協同学習をとりいれた文学教材を用いた授業に関して、学習者の自由記述形式のレポートからの言語データを分析する質的研究を行った。今後の予定として、質問紙（アンケート）によってデータを集め、量的研究と組み合わせ、より妥当性を高めていきたい。

* 本稿は、大学英語教育学会（JACET）第52回国際大会（2013年8月31日、於京都大学吉田キャンパス）で行った口頭発表「協同学習をとりいれた英語教育における英文学教材導入の実践報告——イギリス文学の散文の場合——」に加筆修正したものである。

参考文献

- 阿部真・山西博之（2013）. 「大学英語教育における協働的ライティング学習の可能性——グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づいた分析の試み——」*Language Education & Technology*, 50, 93-117.
- Barkley, E. F., Cross, K. P., & Major, C. H. (2005). *Collaborative learning techniques: A handbook for college faculty*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 江利川春雄（2004）. 「英語教科書から消えた文学」『英語教育』, 53（8）, 15-18.

- 江利川春雄 (2008). 『日本人は英語をどう学んできたか—英語教育の社会文化史』 研究社.
- Jacobs, G. M., Power, M. A., & Inn, L. W. (2002) *The teacher's sourcebook for cooperative learning: Practical techniques, basic principles, and frequently asked questions*. Thousand Oaks: Corwin Press.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. (1994). *The new circles of learning: Cooperation in the classroom and school*. Alexandria: Association for Supervision and Curriculum Development.
- Lazar, G. (1993). *Literature and language teaching: A guide for teachers and trainers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nastasi, B. K., & Clements, D. H. (1991). Research on cooperative learning: Implications for practice. *School Psychology Review*, 20 (1), 110-131.
- 大場浩正 (2010). 「英語スピーキング能力の伸長を目指したインタラクティブ活動における協同学習の有効性」『協同と教育』, 6, 92-94. Retrieved August 28, 2013, from http://jasce.jp/docs/jasce_006.pdf
- 斎藤兆史 (2003). 「英語のなかの日本」 斎藤兆史編著『英語の教え方学び方』, 171-185. 東京大学出版会.
- 斎藤兆史・海木幸登・室井美稚子・中村哲子 (2004). 「文学こそ最良の教材：英語の授業にどう活かすか？」『英語教育』, 53 (8), 6-14.
- 清宮倫子・清宮協子 編著 (2011). 『よくわかるイギリスの文学 *The Poetry and Prose of British Literature*』 南雲堂.
- 高橋和子 (2009). 「文学と言語教育—英語教育の事例を中心に」 斎藤兆史編著『言語と文学』, 10, 148-171. 朝倉書店.
- 竹内理・水本篤 編著 (2012). 『外国語教育研究ハンドブック 研究手法のより良い理解のために』 松柏社.
- 玉井史絵 (2010). 「文学の教材としての可能性—実践的コミュニケーション能力育成のために」 *Proceedings of the 82nd general meeting of the English Literary Society of Japan*, 38-40.
- 後中陽子 (2011). 「英語教育における文学作品導入の調査報告—英詩の場合—」 *JACET Kansai Journal*, 13, 74-85.
- 後中陽子 (2013). 「外国語学習授業における協同学習による英詩導入の実践報告」 *Kobe English Language Teaching*, 28, 69-85.